息にわがする

大原富枝

朝日新聞社

息(いき)にわがする
一九九〇年七月十日　第一刷発行

著　者　大原富枝
発行者　八尋舜右
印刷所　凸版印刷
製本所　清美堂製本
発行所　朝日新聞社
〒104-11　東京都中央区築地五ノ三ノ二
電話　〇三-五四五-〇一三一(代表)
編集・図書編集室　販売・出版販売部
振替　東京〇-一七三〇
定価は外函に表示してあります

©Tomie Ōhara 1990.
Printed in Japan
ISBN4-02-256170-X　C0095

目次

Ⅰ

母を裏切ったこと　10
お弁当は？　14
高知江の口町　16
ほととぎす　22
生きてきた道　25
若い日の私　37
木枯しの季節　40
共通語の残酷さ　42
東京と逢う　44
ある『通信中隊誌』のこと　48

Ⅱ

ふるさとずいひつ　54

日向というところ　86
晩春愁想　92
土佐のお祭り料理　97
四国山脈の秋　100
川のある蒼い夜　103
Ⅲ
春立つ　108
初午の団子　110
はだら雪　112
ふきのとう　114
花まつり　116
春灯　118
壬生念仏　120
たたきと山うど　122
ゆうすげ　124

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

十七夜 126
鰻釣り 128
夏たけて 130
台風のあと 132
葛の花 134
めぐりあい 136
きのこみち 138
曼珠沙華餅 140
霜柱を踏む 142
雁わたる 144
ふろふき大根 146
霜月七日 148
師走の炭 150
つぐみ来る 152
柚子湯 154

Ⅳ

土の香　158
庭の木陰　163
やまうどへの憧れ　169
「行方不明」の願望　172
山いちごとあじさい　174
涼しさを食べる　178
ほととぎすの朝茶事　181
秋草咲く　186
逝く夏　188
しなのの月　191
小さな公園で　193

Ⅴ

蠣瀬川のほとり　200
磯田光一氏を識る　204

モスコーでの一夜　209
今日のわが思い　213
上海の作家王安憶さん　217
さらしなしょうまの咲く日　221
ドミニックの墨絵　226

Ⅵ

歴史と小説のあいだ　230
テレーズ・デスケイルウ　233
大らかさとユーモア　236
荷風文学とのであい　239
中江兆民へ寄せる思い　243
『黒き檜の森』　251
明治の青春　254
人と時代と　257
永遠性の愉楽　260

青春のドラマ　263
『外套』と『そうかもしれない』　271
新春とペトラルカ　274
花々の声と叫び　278
絵の運命　288
おもかげ
Ⅶ
自然というもの　294
弱者　298
ヨブの偉大さ　300
私の好きな聖書のことば　305
息にわがする　310
シモーヌ・ヴェイユのこと　313
〝作られる〟生命への怖れ　317
あとがき　321
初出一覧　323

息にわがする

装画　三岸節子
装幀　多田　進

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

I

母を裏切ったこと

子供のときの行為は、子供だったのだから、と考えることはできても、自分で赦せない気がするものがある。子供は案外に大人に近く、殊に感情の面ではほとんど大人と異ならないとさえ思わせられることがあるからであろうか。

母は十八歳くらいで結婚して、男の子を一人生んだが、夫が日露戦争で戦死したので、そのあと私の父と結婚した。この父ちがいの兄を、私も姉もほんとうの兄のようにして育った。

私が小学校一年生のとき、この兄の家にはじめて女の子が生まれた。母にとっては初孫だったわけで、それこそ目に入れても痛くないという、あのような可愛がりようであった。

三日に一度はその顔を見にゆかないではいられない。昼間は忙しいので夕飯のあとでかけるのだが、七、八丁距てている川下の兄の家へゆくには、川沿いの山の木々の覆いかかるように迫っている淋しい道をゆかなければならない。もちろんバスなどはないころである。なにか怪しいことがあった場所が二か所ほどあって、そこには石地蔵が立っていたりする。

母はその往復に私を伽につれてゆこうとするのである。私自身もこの小さい姪に夢中になって

いたこともあるが、一方では嫉妬もしていた記憶もある。

母は私をつれてゆくためには何かで私の機嫌をとった。多分私はいやだといって肯かなかったときもあったのであろう。帰りは十時すぎになってしまうので寒いときなど眠くはあるし、暗く淋しい山道を帰るのはつらかった。

あるとき、母は一緒にいってくれたら土橋でおいなりさんを買ってやる、といった。村はずれの土橋の袂に、餅菓子や寿司を売っているお婆さんがいて、そこのいなりずしは柚子の香がして、私は頬っぺたが落ちるほどおいしいと思っていた。私は喜んでついていったが、土橋でいなりずしを手に入れると急にこれから淋しい夜道を歩くのがいやになった。

私はうちへ帰るといいだした。母は約束がちがう、という。それでも私は帰ると言い張った。

「そう、そんなら去にや（帰りや）」

母は案外に怒らずにそういい、自分は真暗い道へ向かって歩いていった。

子供心にも私は疚しい気がしていた。裏切りをしたという自覚があった。感情の激しい人である母がそのとき怒らなかったことが心に応えた。母は大層夜道を淋しがる人であった。

その時から二年経って、母は数え年三十九歳で死んでいる。母の年齢を遥かに越してしまった私は、そのときの母が哀れで、自分の行為に改めて疚しさを感じるようになった。私が裏切りという行為をした最初だと思う。

あのとき私はまさか計画的に母を裏切ったのではあるまい、まさかそうではあるまい、と思う。

約束のものを買って貰って夜道をゆくのが急にいやになったのだろうとは思う。しかし幼い日のことではっきりした記憶はない。子供というものが案外無邪気ではないものだと思うとき、私はふっと不安になる。母を哀れと思うのは、母の側に、父ちがいの兄という遠慮がそのとき子供の私に対してさえ働いたのだ、と考えるようになったからである。それがせつない気がする。

五年ほど前に私はヨーロッパを歩いていて、たくさんの教会を観た。キリスト教信者ではない私はスペインでもフランスでも、イタリアでも教会には祈るためではなく、観るためにゆくのであった。そしてどこでも私はステンドグラスに眼も心も奪われるのであった。

スペインやイタリアの田舎の小さい街へいったとき、小さい教会で、不断着のままの男や女が、それも若い青年や娘が跪(ひざまず)いて祈っている敬虔な姿には、信仰に無縁な私が眺めていては悪いような心疚しさを起こさせる雰囲気があった。

殊に小さいボックスになった懺悔室に、赤くほのかにロウソクが灯っていて、ぶつぶつとつぶやく声がする。低い小さな声ではあるけれども、もし私にその言葉がわかるとしたら、意味が汲みとれないほどの低さではないのであった。いったいその人たちは何を懺悔しているのであろうか、と私は一人旅の心安さにそのヨーロッパの田舎町の、中世のままのような石畳の道をコツコツ自分の靴音をききながら歩きつつ、考えた。

いまのこの時代に、懺悔室で懺悔できる罪とはなんであろうか。またそこで懺悔して、それが

どれだけの救いになり得るものであろうか。

シエナはフィレンツェから汽車で一時間ばかりの小さい田舎町で中世がそのまま残っているような静かな、穏やかな町であった。そこのある教会で、白い産衣にくるまれた赤ん坊が、若い祖母らしい人に抱かれ、小学生くらいの小さい叔母にあたるらしい白いワンピースの少女や、若い母親などにとり囲まれて、洗礼を受けにきていた。洗礼が終わったところらしく、一行はいろいろの人にお祝いをいわれながら、石のきざはしを下りてゆくのである。旅行者の東洋の女として、私は彼女たちといっしょに石段を下りていた。

ある純粋な感動が突然私を捉えていた。私はいまなら自分にも素直に懺悔ができる、と思った。いや懺悔がしたいと思った。跪いて祈ることができる、と思った。祈りたい、とさえ私は思った。

あの仄暗い祭壇の前の粗末な木の腰かけのところに跪いて、私は祈ってみたかった。

「お母さん、すみません、あのとき……」

と声にだして懺悔したかった。

もちろん私は幼いときのあの母への裏切り以外に、無数の罪を犯していることは知っている。しかし、懺悔しようにも出来ないそれらの無数の罪、無数の悔恨は、それはそれでいい。あの裏切りだけでも声に出して懺悔してみたいと、そのとき私は抵抗なく考えたのであった。信仰というものに何の構えもなく、一番近くそのとき自分がいることが、ちっともいやではなかった。

お弁当は？

飛行機を間近に見たのは小学校の四、五年生、あるいは三年生のころだったろうか。後に遭難死したが、当時は民間飛行士トップの福永飛行士が、私の故郷の四国山脈の中の小さい町まで飛来して、吉野川の河原に着陸した。全校あげて隣町の河原へ見学に行くことになった。

その朝、私が友達と石けりをして遊んでいると、近所のおばさんが手ぶらの私に、お弁当は？と聞いてくれた。母が亡くなったばかりで、父も遠方の学校に勤めていたので、私は昼食は町で何か買って食べるようにと、同じ学校の上級生の姉からいくらかの小遣いを渡されていた。

町で買うの、と私はのんびり答えた。

おばさんは、今日は町で買うのはむずかしいかも知れんよ、とつぶやきつつ自分の家へはいってゆくと、大きなおにぎりを二つ、竹の皮に包んで持ってきて、私に持たせてくれた。

ほんとうにその日は、おばさんが心配したように近郷近在の人々が、初めての飛行機を見るためにどっと町に繰り出してきて、田んぼも町も河原も一面に人があふれた。とても町まで弁当を買いに行けるような状態ではなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com